

上毛新聞

群馬う若たちプロジェクト FLY2



——ドローイング×グンマとは——

”自画像を通して自分と向き合い、自分らしく生きることとは何か”を
考えるプロジェクト

「激しく美しく生きる」の言葉を残し、時代を超えて支持され続ける山田かまち。
自分らしく生き抜いたその姿に共感した群馬に縁のある企業家と文化人たちが、
自分らしく生きる姿を自画像で表現しました。

それは、群馬を超えた、未来を担う若者たちへの熱いメッセージ。

1人でも多くの若者が自分をみつめ、輝く明日へと飛び立ってほしい、
そんな想いの込められたプロジェクトです。

- P2 …… 「山田かまち — 早世の芸術家」
- P4 …… 特別対談 家入一真 × 木村昌史
- P5 …… 「傷」と向き合う銅版画家 村上早
- P6 …… 母が語る「かまち」
- P7 …… 若者へ送るエール
- P8 …… 「青い自画像」・「生きる」

企画・制作 / 上毛新聞社東京支社・営業局編集部

※「激しく美しく生きる。」は、山田かまちの作品「生きる」からの抜粋です。
※今回、本企画のため山田家の許可を得て、山田家所有の山田かまち作品を加工して提出しています。



撮影地/高崎市内のアトリエ
作品の前に笑顔を見せる村上さん

MURAKAMI SAKI

銅版画家

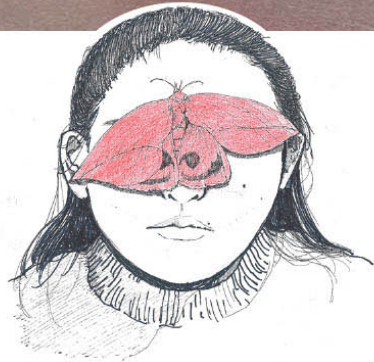


面親が動物病院を経営、病気やけがの動物と二階にいたことが心に刻まれ、多くの作品のコンセプトになっている。先天性の臓疾患で4歳の時に手術。すでに完治したが、トラウマで長くハニック症状に悩まされ、実家以外で夜を過ごせなくなつた。宿病に伴う修学旅行は早退や欠席。太学も一人暮らしができません。高崎市内の実家から電車で片道1時間半。午前6時出発。午後11時半に帰宅する生活を7年間送った。絵を描く

苦 悩

「版は人の心、自分が受けてしまつて傷、誰かを傷付けてしまつてを銅版に描み分けしてもっている。」「薬品で銅を溶かして凹み(傷)をつける腐食技法。リフトグラウンドで1層を超える大型作品を手掛ける新進鋭の銅版画家。村上早さん(27)。緻密な描写ではなく、大胆な構図と太い線で描かれた作品は、見る人に強烈な印象を与える。「憧れは直感で描く『子どもの線』。1個みずしんだ未だに得意な表現方法が多くの人たちを引きつける。」

◇ オタメドの電動式大型プレス機を備える高崎市内のアトリエで、9月に都内で開かれる個展に向けた制作活動に励む。幼少期の心臓手術に伴う心的ストレスや、学生時代は周囲とのズレを感じながらも「つづかかせよう」と裏づけて過ごしてきた。そんな息苦しい日々を救ってくれたのが、絵を描くことだった。



村上早さん自画像「苦しいときは絵をかいて。表現することは自己を救います」

銅版と「傷」分かち合う

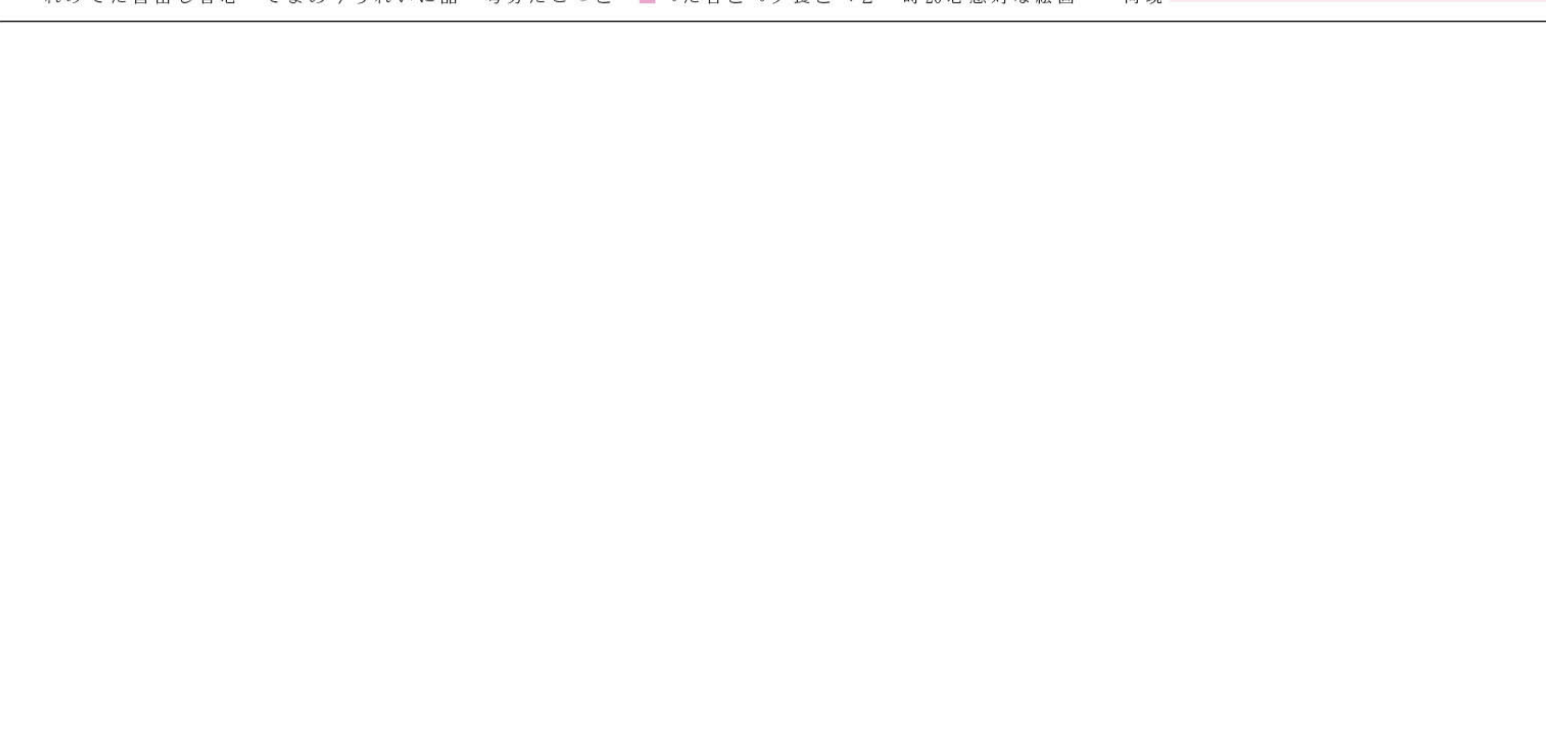
情 熱

「人に好かれるか好かれたいかというところで生きているのではなかったはずだ。(略)おまは生きているとを生き(略)山田がまちがえした力強い言葉に突き動かされる。自分を傷めることばやめ、余計なことを考えずに目の前の作品と向き合う。」

転機となったのは大学5年。12年で学んだ4版種(木版、銅版、石版、シルクスクリーン)の中からはなんとなく一専門に選んだ銅版画。銅を腐食させて作品をつくる技法「リフトグラウンド」と出会い、才能が開花した。「腐食する生かす」が人間の肉体と似ている。生きた銅版と向き合うことで人間に生まれてしまった後悔が少しずつ浄化されていった。

村上 早(むらかみ・さき)1992年高崎生まれ。高崎経済大附属高芸術コース、武蔵野美術大造形学部油絵学科版画専攻卒業。同大学院造形研究科修士課程美術専攻版画コース修了。15年「第6回山本期版画大賞展」大賞、17年「群馬青年ビエンナーレ」優秀賞など受賞。19年に長野県の上田市立美術館で約150点の個展「gone girl 村上早展」を開催。

制作活動が活発になるにつれ、心臓手術による精神的な後遺症も改善に向かっている。2年前に意を決して初めて友人と泊りかけの旅行に出かけた。「夜もすんなり過(せた)自分」に感動した。1幼い頃に受けた「傷」が完全に消えることはなくても、向き合おうとする姿勢がにみ出た作品に人は心を奪われる。これからは銅版と「傷」を分かち合い、作品に魂を吹き込む。





自分と向き合う時間を

夏の盛り、20日ほど前に誕生祝いとして贈られたエレキギターを演奏中に突然逝ってしまったかまち君。母、千鶴子さんを自宅に訪ね、愛息の死後40年以上を経て思うことを聞いた。



81歳で亡くなったご主人が好きで庭に挿えたという笹藪が一様活けられた花瓶を前に、かまち君との思い出を語る母の千鶴子さん

「仕事と三人の子育てを両立しながら法政大文学部(通信教育部)を卒業した千鶴子さんは今年、82歳になりました。父の戦死で家計を担うためにJ.T.の前身、旧日本専売公社に入社しました。大学の勉強をしていると次男は膝に乗り、長男のかまちも右腕をつかんでまわりつく。「ママの手は鉛筆の匂いがする」とかまちが言い、「ママはデブだ、お嫁坊」と続けるので「かまち、それを書けば詩になるのよ」と言う。「はくはいくらでも書ける」と意気込み、次男と掛け合いのようにして詩を書き続けました。「素晴らしいね」とおだててやらせるのが上手い母親でした。

夕飯の支度中に「ママ、人間にとって一番難しいことは何だと思う」と尋ねると「降参かい。答えは何も考えないことだよ」と言ったんですけど、初めは意味がわからなくてばかりんとしてしまいました。そんなことが何度もありました。先日、美術館でギョラリートークをしたとき、教師になったかまちの同級生が来てくれました。「どこにもいってほしい。かまち君のような子も、まだ一人も出てないんです。かまち君は特別な才能もってていたんですね」と58歳になった彼女が話してくれました。

「この頃思い出すのは、階段を上り下りする子もたちの足音。かまちはつま先で歩く癖があった。「どんとんとん」。次男は「だっだっだっ」、幼い長女は両手両足を使う「ばたばたばた」。若かった私は「うるさい」と叱りました。けれど、元気な子どもたちが立っていたあの足音は、今になって「幸せの足音」だったのだと気づきました。どなたとも共有できる幸せ感だと思つたので、歳月を重ねると、「作品が全く違つて見える」と話す来館者があります。作品を眺めながら自分と向き合う時間を何度も持つていただけたら、それが皆さんの中で生き続けるということですから。

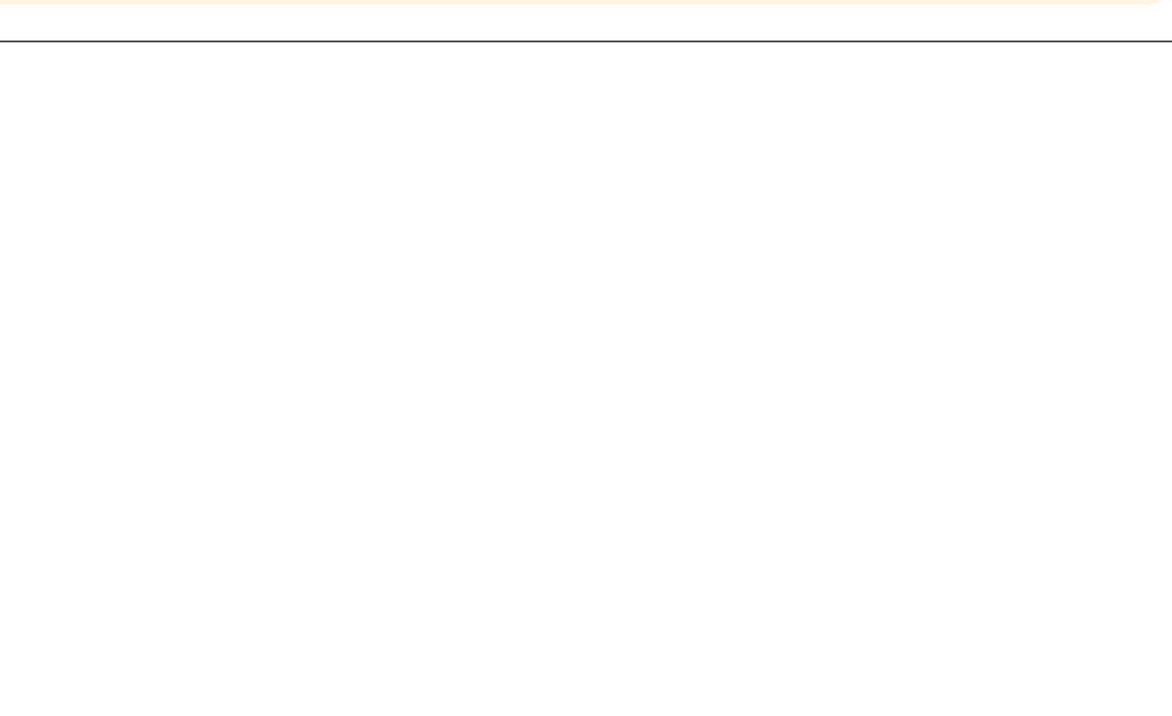
朗らかでにぎやか
「著書『かまちの海』(文藝春秋)を読むと、祖母と両親、弟妹に囲まれた、にぎやかな家庭が思い浮かびます。口は遅かったけれど、鉛筆がちゃんと持てない、半分から夢中になって描いてました。ある日、トカゲを追いかけて緑の下に潜ろうとしてランドセルがつかつかえて入れず大騒ぎ。動物の動きを真似して弟妹を大笑いさせたり、朗らかでにぎやかな子でした。

今、気づく
「幸せの足音」
「作品が全く違つて見える」と話す来館者があります。作品を眺めながら自分と向き合う時間を何度も持つていただけたら、それが皆さんの中で生き続けるということですから。

愛、その日
山田千鶴子
はるばる北海道から長期滞在に我が家へ着いたばかりの「おはなちゃん」を囲んで、私と母と三人、賑やかにお茶を飲んでいた。
そこへ外から音がする。桃の花を抱えた母の友達のお江ちゃんのお顔があった。「桃の花のおすそわけ。お節句は終わったけど、大きな東を「よここいしょ」と下ろした彼女は、「あら、おはなちゃん、北海道から飛行機で？」と歓喜の声を上げる。おはなちゃんも「嬉しいわあ」とうらやまそういって、「こんなに！」と各々の感動の音が花祭りの盛り上がりになった。
お江ちゃんの手際よく枝分けをし、手にはマジックペンを持った馬やライオンや怪獣をする描く。茶菓子代わりに見ていたものよね。二歳とは思えない。うちのお江ちゃんも、かまち君の描いたスバル360の車が何台も連なって道を曲がる絵が気に入って、家の壁に貼ってね。この子は天才だ。と口調を高めて明日出直すよと上らずに帰って行った。
そこへ、当のかまちが玄関から廊下を渡って走って帰ってくる。「ハイカラおばあちゃん、お名前をどうおはなちゃん、かまちはいさなりハグをおす。
早速北海道のバター給やホワイトチョコを両手に持ったかまちは「六年生の卒業式の練習で、僕達五年生は早帰りでした」と丁寧に説明をして、二階に消えた。アイヌの木彫りのハンガリー、細と白きながらコーヒーに飲み換えている。「おいしうな匂い、だ」とかまちが下りてくる。
「おはなさん、カラヤンのベーターウエンを贈りませんか。かまちが誘う。ママもどうぞ。ハ畳間に据えられたステレオの前、かまちが並べた藤の椅子へと案内する。
「畳の部屋なので、音響がいまいちなので、すみません」と丁寧に挨拶してから、かまちは「交響曲第六番へ長調、作品68番、田園、ベルリンフィル……」と説明する。
スピーカーから静かに音が流れ出し、やがて高く響いて広がり、おはなちゃんも目を閉じて、気持ちよさそうに全身を揺らした。桃の花もカラヤンに誘われて、一際匂いを放っているようだ。かまちは早くも、ベルリンフィルを統括しているカラヤンになっている。
「夕食の本格派カレーの準備をしなければ」と私は気づいて、そっと席を立った。かまちは土下座されて買ってきた夕飯、おじや、高畑だから、「当分夕飯は、うっかり三日目に母は好きです。焼肉を用意して、僕は食べない」とかまちは夕飯を断固拒否した。音楽会が終わったおはなちゃんに母が話すと、「かまちは

「すばらしい事をすばらしい言葉を使わないで言います。比較的大きなものの中のひとつとして、それは愛ですか……。今も私の生きる大事な課題のひとつです。」
千鶴子さんが描いた自画像

んは本質的に純粋なよ。そう感動して、首を何度も傾き返し、涙ぐんでくれた。「かまちは本当に素敵。私幸せだわ。毎日二曲ずつ聴かせてくれるの」高揚する。
母がお風呂の焚き付け用に丸めてキッチンに置いておいたのを見つけたおはなちゃん、「何でこするの」と丁寧に広げ始め、「これ穿たせよ。こっちは女神でしょ」と一枚一枚丁寧にしわを伸ばした。「ルネッサンス期の美の女神はポステイチェリですよ」とかまちは振り返る。
母が「だって毎日毎日、何十枚も描くものだからこうしてるの」と苦笑いして説明する。「それだね」と「そのまじっとしていて、かまちちゃんに言われて、絵を描くために観察される人になるのよ、毎日のように」と母が話す。おはなちゃんは「まあ、私になりたいわ」とこまでもかまちの味方だ。
手を休めず丸めた絵のしわを延ばすはおはなちゃん。「北海道へ行く少し前だったわね。かまちは幼稚園の頃、ママとメーデーの帰りに魚屋で鯛を一本、新聞紙に包んで、抱えて持ち帰ったことがあったわね」と思い出して笑った。
「中華鍋で、丸のままそっと鍋を揚げて、形をくずさないように、そっと身を食べて、頭と骨を残すように」とかまちに宣告されたのだ。
食べる前から食べるまで、サバの変遷をスケッチするかまちを見ながら、皆で固唾を呑むようにそっと箸をついて食べたことを話した。
「何でもかまちは真剣に取り組むのよね。かまちは成長をずっと見たわ」と。
クラシックに心酔していたかまちは、中学生になった春休み、不意に大音響のロックをかけて、家中を震動させたことがあった。「ママ、そんなに嫌がらないで。僕がきくと、民謡の好きなパパ、ジャンソンの好きなママ、歌謡曲の好きなちゃんちゃん(祖母の呼び名)と、ジャンルの違う人が皆、満足するようなロックを必ずつくるから」と延々と語ったものだった。
日々、呼吸をする如く、描いた絵と言葉を膨大に残して逝った彼の、色褪せない一説。
「すばらしい事をすばらしい言葉を使わないで言います。比較的大きなものの中のひとつとして、それは愛ですか……。今も私の生きる大事な課題のひとつです。」





群馬に縁のある企業家と文化人たちが、自分らしく生きる姿を自画像で表現しました。

1人でも多くの若者が自分をみつめ、輝く明日へと飛び立ってほしい、

そんな想いを込めた言葉です。

※QRコードから、自画像・メッセージ・顔写真・プロフィールが見られます。

スマホ画面イメージ



特設サイト

<https://www.jomo-news.co.jp/drawinggunma/>
パソコン・スマホから見られます。



村上 早
銅版画家



岡田 浩暉
ミュージシャン/俳優



ROGUE
香川 誠
ミュージシャン/ギタリスト



木村 昌史
株式会社オールユアーズ 代表取締役



渡川 清彦
俳優



PERSONZ
JILL
ミュージシャン



たかの 友梨
たかの友梨ビューティクリニック 代表取締役会長



内藤 理沙
女優



ぐんまちゃん
群馬県のマスコット



高木 茂
公益財団法人 高崎財団 理事長



林家 つる子
落語家



廣橋 賢一
カーリットホールディングス株式会社 代表取締役社長



柳家 小もん
落語家



ロバート
山本 博
お笑い芸人



内山 充
上毛新聞社 代表取締役社長

※並び順については、順不同です。

